

# 重視文章脈絡的日語教育文法研究 —以 TEIRU 的用法為例—

王世和

東吳大學日本語文學系教授

## 摘要

2003 年以後，日本學者提倡日語教育文法的概念，並獲得多數研究者支持，提出各種研究方法。本稿贊同日語教育文法理念，認為文法研究應有助於教育現場，提議重視文章脈絡的研究觀點。舉 TEIRU 為例，說明此研究觀點之可行性。論文主要論點可彙整如下：

- a. 文法研究需要新觀點，研究有助教育現場的文法。
- b. 重視文章脈絡可以是一個新的研究觀點。
- c. TEIRU 的用法可以透過跟 SURU 的組合來理解。
- d. 基準時間不是明示性的情形，必須從文章脈絡中來了解。

關鍵字：敘述性文章、基準時間、文章結構、文章脈絡、明示性

受理日期：2018.03.10

通過日期：2018.05.11

# **A study of a context-oriented Japanese Pedagogical Grammar: Centered on the usage of Te-iru**

Wang, Shih-Ho

Professor, Soochow University, Taiwan

## **Abstract**

Since 2003, Japanese scholars have been promoting the concept of Japanese pedagogical grammars and supported by many researchers by proposing various relevant research methods. This study agrees with the ideal for Japanese pedagogical grammars, believes that studying grammars can be helpful at teaching scenes, and proposes the research perspective of valuing context. TEIRU is used as an example to show the feasibility of this research perspective. The main arguments of this study are summarized below:

- a. New perspectives are needed for grammar research to study grammars which can be helpful at education scenes.
- b. The context-oriented perspective can be a new research perspective.
- c. The usage of TEIRU can be comprehended based on the combinations with SURU.
- d. In cases without explicit reference time, context is required for understanding.

Keywords: narrative, reference time, article structure, context, explicitness

# 文脈重視の日本語教育文法の研究 —テイルの用法を例に—

王世和

東呉大学日本語文学科教授

## 要旨

2003年以降、日本語教育文法の概念が提唱され、多くの研究者に支持され、多様な研究方法が試みられてきた。本稿では、文法研究が教育現場に役立つという日本語教育文法の理念に賛同し、文脈重視という研究視点を提案することを目的とする。具体的には、テイルという文法項目を例に挙げ、その可能性を論じた。論文の要点をまとめると、以下のこととなる。

- a. 教育現場に役立つ文法研究の新たな視点が必要である。
- b. 文脈重視という研究視点が一つの可能性として考えられる。
- c. テイルの用法はスルとの組み合わせが理解・産出につながる。
- d. 基準となる時間が明示的でない場合は、文脈から読み取る必要がある。

キーワード：物語文、基準時間、文章構成、文脈、明示的

# 文脈重視の日本語教育文法の研究

## —テイルの用法を例に—

王世和

東呉大学日本語文学科教授

### 1. はじめに

2003年以降、いわゆる日本語学の「中心的なテーマの記述的研究の成熟」（野田 2004）や、日本語記述文法と日本語教育のための文法記述の分離（野田 2005、白川 2005、庵 2011）といった影響を受け、日本語教育文法の概念が提唱されるようになり、今日まで至っている。その中で、日本語記述文法と日本語教育との関係への疑問、日本語教育文法という考え方や必要性が論じられ、また、日本語記述文法とは異なった新たな研究方針・手法なども試みられている。それにより、日本語教育文法の見地に立つ研究の方法論的なものはある種の方向性が見出された。しかし、こうした新たな動きが始まったのは十年数前からということもあり、様々な研究方法の可能性はまだ模索中という段階である。

本研究は、教育現場に役立つという日本語教育文法の研究理念に賛同し、文脈重視という研究視点の導入により、日本語教育文法の一つの可能な方向性を提案することを目的とする。研究対象としては、多くの文法項目や文法の現象が考えられ、今回は学習者が苦手とするテイル<sup>1</sup>の用法を取り上げる。具体的には、物語や出来事を述べる文章を対象に、前後の文脈や共起表現に注目するという観点からテイルの用例を分析する。それにより、文脈に存在する「基準時間」（高橋 1985、工藤 1995）が「動作の継続」「変化の結果の継続」

---

<sup>1</sup>寺村（1984:144）は「～シタと、～シテイタの使い分けは、日本人にとってはっきりした違いのように思われるが、多くの外国人にとって、意外に難しい点の一つである」とあり、過去の出来事を語る時のテイルの習得困難を指摘している。

(奥田 1978、工藤 1982 など) の意味よりも、理解・産出につながることを示す。それらを踏まえ、テイルについての私見と、文脈の中で文法項目を捉えるという研究視点の重要性を述べる。

## 2. 問題提起と本稿の内容

### 2.1 問題提起

本節では、なぜテイルの説明に「動作の継続」「変化の結果の継続」だけでは不十分で、なぜ他の視点が必要なのかを述べる。

- (1) ①或日、日暮間もない時であった。②Aは銀座の方から京橋を渡って、かねて聞いていた屋代の鮎屋へ行って見た。③其処には既に三人ばかり客が立っていた。④彼は一寸躊躇した。⑤然し思い切ってとにかく暖簾を潜ったが、その立っている人と人との間に割り込む気がしなかったので、彼は少時暖簾を潜ったまま、人の後に立っていた。(小僧の神様)

この例には「立っていた」が二回使われている。③と⑤の文末にあるテイルの説明には、恐らく、「過去」「変化の結果の継続」というテンス・アスペクトの概念が応用され、③も⑤も同じように扱われることがほとんどであろう。しかし、果たしてこの二例は全く同じ用法として扱い、同じ説明でいいのか。

注目したいのは③の「既に」と、⑤の「少時」である。文末は何れも「立っていた」だが、二文の共起する表現が異なる上に、相互入れ替えることもできない。このことは、③⑤の「立っていた」は別物で、その違いについて考える場合、新たな視点による説明が必要だと示唆する。もう一例を挙げる。

- (2) 見出し：

キューバ戦勝利の侍 J 小久保監督「予想以上にプレッシャーがかかった」

本文：

第 4 回ワールド・ベースボール・クラシック (WBC) プール B が、7 日に東京ドームで開幕した。侍ジャパンは、初戦

のキューバ戦を 11 対 6 で勝利。強化試合では阪神タイガース相手の負けを含む、2 勝 3 敗で本番を迎えたが、小久保裕紀監督はかなりのプレッシャーを感じていたようだ。

「予想以上にプレッシャーはかかっていた。だが、選手は普段通りのプレーで入っていた」と小久保監督は試合後に語り、(後略)。(ベースボールチャンネル 2017.3.8)

全日本野球チームの代表監督の発言が新聞記者により引用された用例である。「かかっていた」という監督の元の発言は、引用先では「かかった」になっていることに注目したい。ここでは二つの疑問が生じる。この用例のテイルとスルの用法はどう違うのか、また、テイルがスルになった理由は何なのか。この二点については、「かかっていた」が持つ「変化の結果の継続」という意味だけでは説明ができないようで、他の視点が必要になると思われる。

## 2.2 本稿の内容

本稿では、文脈の中でテイルを捉えることが理解・産出につながることを論じ、文脈重視の重要性を提案する。各節の内容は以下となる。3 節では、日本語教育文法の現状・動向を概観し、その中で文脈重視の研究概念の位置付けを考える。4 節では、先行研究の主な論点を統語論研究と文章研究に分け紹介し、文脈の観点による分析に必要な概念をまとめる。5 節では、文脈から見た二種類のテイルの用法を分析し、文脈重視の観点の重要性を主張する。それらを踏まえ、6 節では、テイルの用法と教授内容について私見を述べる。

テイルは時間に関する文法項目であるため、時間軸の中でその用法を捉えることが必要である。そこで本稿では、時間軸が重要な役割を果たす物語文の小説・童話、新聞記事を考察対象とする。これらのジャンルは、過去の出来事を内容とするもので、テイルの用法、特に典型的用法が最も多用されると思われるからである。

なお、用語については、本稿は過去の出来事について論じるもので、本来はテイタの使用が論文内容に一致するが、しかし、ここでは、多くの先行研究同様、ル形・タ形の対立を問題としないため、

混乱を避けるために、以下、实例に基づいた説明以外は、テイルの用語を使うことを原則とする。なお、スルとの対立という観点から捉える場合、先行研究（工藤 1982、日本語記述文法研究会 2007 など）に倣ってシテイルの使用もある。

### 3. 日本語教育文法の動向と本研究の位置付け

本節では、日本語教育文法の由来・動向を紹介し、文脈重視の位置付けについて論じる。

今日の日本語教育文法概念が新たに提出されたのは、2003年度大阪大学で開かれた日本語教育学科秋季大会のシンポジウムが始まりである。六名の研究者が「新しい日本語教育文法—コミュニケーションのための文法をめざして—」というテーマを掲げ、「日本語学の成果としての文法を教育現場に応用する」教育現場の現状を問題として取り上げ、日本語記述文法に対し日本語教育現場に役立つ文法の必要性と方向性を論じている<sup>2</sup>。この考え方が多くの研究者に支持されてきた<sup>3</sup>。代表的な書籍としては、例えば、野田（2005）、内田（2009）、森・庵（2011）、庵ほか（2017）が挙げられる。こうした研究は、私見では、以下の大きな研究概念の流れがあると思う。

- (3) a. 「コミュニケーション能力」「四つの言語活動」（野田）
- b. 「理解のための文法」（野田）
- 「産出のための文法」（庵）
- c. 「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」（井上）
- 「三位一体の研究構想」（張）
- 「母語の知識を活かした日本語教育」（庵）

一つ目の流れは 2003 年秋季大会の主張で、話す、聞く、読む、書くというそれぞれの言語活動のための文法の必要性を訴え、日本語

---

<sup>2</sup> このシンポジウムにかかわる研究者は以下となる。企画・運営担当大会委員：白川博之、小林ミナ。司会：野田尚史。発表者：野田尚史、フォード丹羽順子、山内博之、松崎寛、宮谷敦美、由井紀久子。なお、括弧内の内容は予稿集 p17 から引用である。

<sup>3</sup> 小林（2003）には、日本語教育文法の由来・動向がまとめられている。

教育文法そのものの重要性を主張するものである。二つ目は、一つ目の流れを踏まえ、理解・産出に特化し、そのために必要な文法を作り出すことを特徴とする。この二つの流れはすべての学習者を対象とする考え方だが、それに対し三つ目は、学習者の母語を考慮する文法研究の重要性を主張している。

このように、コミュニケーション能力に直結する文法の重要性という理念の下で、実に多くの研究概念・方法・成果が次々と発表されている。では、2003年からのこの一連の研究の中で、本研究はどのような位置付けになるのか。それについて考えるためには、森(2011:53)でまとめられた以下の表が参考となる。

表1 「論文篇」にみる多様なアプローチ

		庵	岩田	太田	小西	建石	中俣	橋本	藤城	松田	森
2. 日本語教科書調査	2.1 提出課と例文		○	○			○		○	○	○
	2.2 コーパスとして	○		○		○					
	2.3 練習問題		○								
3. コーパス調査	3.1 書き言葉			○	○	○	○				○
	3.2 話しことば		○	○	○		○				○
	3.3 学習者		○				○	○	○	○	○
4. 語彙調査	4.1 語彙分類表					○		○			
	4.2 スタンダード										
5. アンケート調査				○					○	○	○
6. 言語使用調査		○			○						○
7. 実験調査		○							○	○	
8. 統計的検定		○	○				○			○	○

この表では、十名の研究者の論文には計7類12種の研究方法が採用されている。しかし、各論文の後に書かれた「この論文はどのように書かれたのか」の内容からも分かるように、文脈という概念についての記述が見当たらない。繰り返すこととなるが、本研究は日



本語教育文法の研究理念に賛同し、文脈重視という研究視点の重要性と可能性について論じることを目的とする。そのためには、今回は具体例として学習者が苦手なテイルを取り上げる。こうした視点の研究の積み重ねにより、もう一つ研究の流れができれば、微力ながら少しは教育現場に役立つだろうと思う<sup>4</sup>。

#### 4. テイルについての先行研究

文脈の観点から論じる前に、本節ではまず、統語論研究と文章研究に分けて、本研究と関係する概念を紹介する。

##### 4.1 統語論研究の主な見解

テイルの意味・用法については、アスペクトの主な話題として注目されてきた。ここでは、「テイルは継続である」「基準時間」の二点について説明する。まず、一つ目の「テイルは継続である」であるが、奥田(1978)は以下のことを指摘している。

- (4) スルとシテイルは「ふたつのかたちが《つい》をなしながら、  
oppositionalな関係になる」(p205、下線筆者、以下同様)
- (5) スルとシテイルは「《ひとまとまりの動作》 《継続のなかの動作》とをみわけることができる」(p216)
- (6) シテイルの意味は、「動作の継続」「変化の結果の継続」(p209)  
という二つの意味を実現している。

上記の(4)はそれまでの研究者になかったもので、アスペクト研究に新しい方向性をもたらした斬新な考え方であった。(5)(6)と一緒に考えると、以下の内容にまとめられる。

- (7) スルとシテイルは対をなすものとして認められ、両者はそれぞれ「ひとまとまり」「継続」の動作を表すが、その中のシテイルは「動作の継続」と「変化の結果の継続」の二つの意味を実現する。

---

<sup>4</sup> これまでの研究には、文脈重視の研究視点や研究成果がないわけではない。「ハ／ガ」、指示表現の研究以外に、例えば近年発表された書籍には太田(2014)がある。そうした研究の全体像を理解するには、文脈の種類(王 2015)を踏まえ考える必要がある。その全貌についてはまたの機会に論じる。

奥田(1978)の主な考え方は以上にまとめられると思うが、それを踏まえ、同論文では、シテイルの意味についてこう指摘している。

(8) あるばあいには《動作の継続》であり、あるばあいには《変化の結果の継続》であって、《継続》ということではひとつである。(p209)

テイルの意味について考える場合、「動作」か「変化の結果」かという相違性をめぐる考察・分析がほとんどである。しかし、同論文はその違いを認めつつ、「継続」という共通性にも注目している。このことは、実際、5節の分析から分かるように、文脈重視の研究視点からも大いに参考になるため、重要な概念として指摘しておきたい。

次は、二つ目の「基準時間」<sup>5</sup>という概念である。これは、高橋(1985)がつくった用語で、図形で説明すると以下となる。

- 部屋に入った時に、みんなが美味しそうに食べていた。



- 部屋に入った時に、電気がなぜか消えていた。

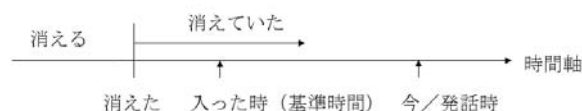


図1 テイルの意味と基準時間の関係<sup>6</sup>

図1では、「食べていた／消えていた」というテイルの用法があり、その用法の存在に気づく時点を示す「に入った」がある。ここのテイルの用例が「動作の継続」か「変化の結果の継続」かも重要だが、

<sup>5</sup>高橋(1985:13)では、「基準時間」の種類に「瞬間であるばあい」「はばのある時間であるばあい」があるとしているが、本稿5.3節で論じるのは「基準時間が瞬間であるばあい」の用例に属する。また、この概念は、工藤(1995:99)では、「発話時点／出来事時点」に対し、「設定時点」と呼ばれ、シテイルの「パーフェクト性」の意味を分析する上で重要な概念とされている。

<sup>6</sup>図形と例文は筆者によるもの。

テイルが表す事象が「入った」時点に存在する、ということも重要である。このように、テイルが示す何らかの事象の継続が分かった時点のことを「基準時間」というのである。

また、「基準時間」の特徴について高橋(1985)では、以下のことも言及されている。

(9) 条件句、条件節でそれがわかることがひじょうに多い。このばあい、条件句節は発見の条件をしめしている。そのなかでも、移動動詞、みることや気がつくことをあらわす動詞の条件形がめだつ。(p266)

(10) 条件形でない従属句うや、まえの文でわかるものもある。(p266)

このように、「基準時間」の存在のみならず、それがわかる方法も述べられている。この二点を図1と合わせてまとめて考えると以下のことが言えると思う。

(11) テイルの用法を理解するのに「基準時間」が必要となる場合がある。それにはまず、明示的な場合があり、それが移動動詞、視覚・知覚動詞の形で条件節に現れることが多い。また、明示的でないな場合もあり、その場合、先行文脈から読み取ることは可能である。

「基準時間」の説明は以上だが、これと「テイルは継続である」は、時間軸の中でのテイルの用法を捉える上で重要な手がかりとなる。大事な概念として確認しておきたい。

#### 4.2 文章研究の主な見解

文章研究では、文章全体の中で部分的要素としての文法項目を捉えるという概念がある<sup>7</sup>。テイルの考察も同じ考え方に立つため、文章（主に物語文）全体の中で捉えなければならない。その文章中の用法についての考え方は、以下の二点に集約できる。

(12) 「テイルは、出来事の最初と途中に現れる二種類がある」

---

<sup>7</sup>永尾(1983:19-20)、永野(1986:232)。

「何れの場合も、スルとの組み合わせで捉える必要がある」  
 テイルの用法については、この二点が重要だと思われるが、以下、  
 背景知識となる物語文の文章構成を説明する。それについては、永  
 尾(1975、1992 など)では詳しい論述があり、以下の図形にまとめら  
 れる<sup>8</sup>。

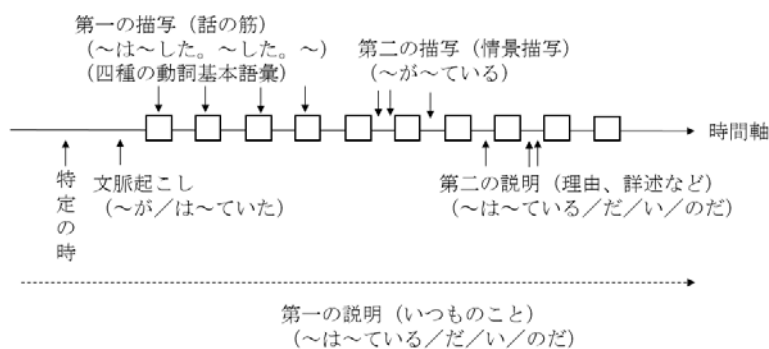


図 2 物語文の文章構成

図 2 を以下に説明することができる。まず物語文は、「特定の時」とテイルの用法（文脈起こし）があり、その後の文脈では時間の流れに沿い物語が述べられていくが、本筋を構成するのが一コマ一コマとしての「第一の描写」で、物語の最も基本的構成と認められる<sup>9</sup>。また、特定の時を超えたものとしての「第一の説明」と、時間の流れを止める「第二の描写・説明」もあり、この三つの用法にテイルが主に使われている<sup>10</sup>。

ここでまず、「文脈起こし」と「第二の描写・説明」に使われるテ

<sup>8</sup>永尾(1975、1992)は、物語文のことをそれぞれ「客観表現がまさった文章」「事件の話をする文章」と呼んでいる。

<sup>9</sup>王(1999)では、第一の描写が主に移動・視覚・発言・心情語彙で構成されているとされている。

<sup>10</sup>それぞれの用法については、永尾(1992)では詳しい説明がある。簡単に示すと以下となる。第一の描写「特定の時に従うもの／一コマとしてある」、第一の説明「特定の時を超えたもの／いつもそうである」、第二の描写「時の流れを止めて、気分や気持に従って、その気分や気持に合致した情景を選択して、それぞれ別々のことを、特には順序もなく並べ挙げているもの」、第二の説明「前文を受けて、理由を言う、取り立てる、詳しくする等と、すべて前文を確かなものにする解説」。

イルに注目したい。前者は出来事の最初に現れるのに対し、後者は途中に使われるのを特徴とする。5 節で述べるように、前後の文脈を考えると、この二種類のテイルとスルとの時間的關係はそもそも異なるものである。このことから、「テイルは、出来事の最初と途中に現れる二種類がある」という結論に導くことができるのである。

次に、「何れの場合も、スルとの組み合わせで捉える必要がある」についてである。注目したいのは、この二種類のテイルと前後文脈にあるスル（第一の描写）との位置關係である。物語の一コマコマとしてのスル（第一の描写）の文は、それぞれ、出来事の最初に現れるテイル（文脈起こし）の後と、出来事の途中に現れるテイル（第二の描写・説明）の前にある。分かりやすく示すと、前者は「～ていた。～た。」で、後者は「～た。～ていた。」ということになる。この位置關係はテイルの用法を理解する上で最も重要な概念として考えられ、二つ目の大事な概念として確認しておきたい。

#### 4.3 先行研究のまとめ

以上、4.1. と 4.2 では、テイルの用法を考える上で重要な概念として、「テイルは継続である」「基準時間」「テイルは、出来事の最初と途中に現れる二種類がある」「何れの用法も、スルとの組み合わせで捉える必要がある」の四つを紹介した。前述のほかの概念と合わせて考えると、先行研究による語学的見地は改めて以下のような内容にまとめられる。

- (13) a. テイルについては、「動作」か「変化の結果」かの違いに注目しがちだが、基本的にはテイルは「継続」である。
- b. スルとシテイルの違いは、事象を「一コマ(ひとまとまり)」として捉えるか、「継続」として捉えるかにある。
- c. テイルが表す「継続」の事象を捉えるためには「基準時間」が参考となる。
- d. テイルの用法には、出来事の最初と途中に現れる二種類がある。
- e. この二種類のテイルの用法について考える場合、前後文脈

のスルの用法と一緒に考えることが必要である。

- f. 移動・視覚といった知覚の変化を表す語彙が「基準時間」となることが多い。

## 5. 文脈から見たテイルの用法

4 節では、テイルの用法を文脈重視の観点から考える際に参考となる先行研究の論点を紹介した。それを踏まえ、5 節では、实例を用いて文脈の視点からテイルの用法を具体的に分析する。

### 5.1 二種類のテイル

例(1)の再掲だが、「立っていた」に続く文脈を二文加え説明する。

(14) ①或日、日暮間もない時であった。②Aは銀座の方から京橋を渡って、かねて聞いていた屋代の鮎屋へ行って見た。③其処には既に三人ばかり客が立っていた。④彼は一寸躊躇した。⑤然し思い切ってとにかく暖簾を潜ったが、その立っている人と人との間に割り込む気がしなかったので、彼は少時暖簾を潜ったまま、人の後に立っていた。

⑥その時不意に横合いから十三四の小僧が入って来た。⑦小僧は A を押し退けるようにして、(中略)檣板の上を忙しく見回した。(小僧の神様)

この例の基本的要素を確認しておく。文①には「或日／～時」、文②④⑥⑦には「～した」、文③⑤には「～ていた」が使われている。文①は図 1 で言う「特定の時」である。文②④⑥⑦はその特定の時に従って出来事の変転を述べていくもので、物語の本筋となる「第一の描写」である。では、文③⑤はどういうものなのだろうか。前後の文脈と一緒に考えると以下となる。

(15) ②「Aは～行

って見た」、③「～客が立

っていた」、⑥「～小僧が入って来た」  
この例では、「～た。～ていた。」(文②③)と、「～ていた。～た。」(文⑤⑥)とあり、スルとテイルの組み合わせは、二つのパターンが見られる。まず、前者の場合、テイルの先行文脈には、先行研究

で言う移動・視覚を示す「行って見た」が見られる。これは4節の概念で説明すると、つまり、スルの文②が動作を一コマ（ひとまとまり）として捉え、それが「基準時間」となり、その時点に存在する事象を、テイルの文③が示す。それに対し後者の場合、前者とは逆に、文⑤のテイルは、後続文脈にスルの用例があり、図2でいう「文脈起こし」の一種として捉えられる<sup>11</sup>。ここのテイルとスルの文の関係は、言ってみれば、文⑤が継続している間に、文⑥の事象が起こったということになる。

テイルの前後文脈と合わせて考えると、出来事を述べる文章・談話の場合、「～た。～ていた。」「～ていた。～た。」の二種類があると言える。この組み合わせは実際のコミュニケーションの場では実に大きな役割を果たす。5.2節 5.3節に分けて詳しく述べる。なお、使用数の上では、「～た。～ていた。」の方が「～ていた。～た。」より遥かに多い。しかし、文章・談話での出現箇所から考えると、「～ていた。～た。」が出来事の最初に、「～た。～ていた。」が途中で現れるため、文章構成を念頭に置くという意味でも、出現順序の順で論じたいと思う。

## 5.2 「～ていた。～た。」

5.2節では、出来事の最初に現れる「～ていた。～た。」を論じる。「基本的概念」「多様なバリエーション」「まとめ」に分けて述べる。

### 5.2.1 基本的概念

(16) 寒い空っ風の吹く日暮だった。私は小説家の中津栄之助と山の手の或町を歩いていた。

「正月号の仕事はもう皆済んだのか？」私はこの間中から口癖のように忙しい忙しいと大袈裟に吹聴しながら、毎日何処か出歩いてばかりいる中津にこう訊いて見た。(冬の往来)

この例では、最初に「日暮」(特定の時)が提示され、その後に「～

---

<sup>11</sup> 正確には、文章の途中にあるもので、「文脈起こし」よりも「文脈転換」の方が適切である。両者の出現場所に違いこそあるが、新しい場面を設定するという意味では同じ用法として認められる。ここでは、その共通性を重視し、下位分類しないこととする。

歩いていた」(文脈起こし)があり、それを受け、「～訊いて見た」(第一の描写)が使われる。図1に照り合わせると、文章の書き出しとしては形の整った用例が分かる。

このような用例は、「～ていた。～た。」という文型を持ち、テイルとスルの動詞の時間的關係は、以下となる。

(17) テイルが表す継続の時間の中に、何らかのことが起こる。それが後続のスルの文により表される。

前述の通り、テイルは基本的には「継続」を表す。一方、スルは事象を一コマ(ひとまとまり)として捉える。テイルの文は時間の幅のある事象を示すことで、その間に起こるスルの文を引き出す。そのスルの文が後続文脈の一連の描写(スルの文)の始まりでもある。出来事がそこからスタートする意味では、テイルの文がスル文の、一種の「発端」として考えることができる。

このような「～ていた。～た。」の組み合わせは、出来事の最初に現れ、書き言葉でも話し言葉でも多用されている。文脈の観点から見るとテイルの一つの大事な用法として考えたい。

### 5.2.2 多様なバリエーション

ここまで「～ていた。～た。」の基本的概念について述べたが、その表現方法は多くあり、例えば以下の例がある。

(18) ある日、おばあさんが、川のそばで、せっせと洗濯をしていますと、川上から、大きな桃が一つ、「ドンブラッコ、スッコッコ。ドンブラッコ、スッコッコ。」と流れて来ました。(桃太郎、楠山正雄)

(19) 同じような発表が続いて少々うんざりしかけていたとき、「略」という張さんの言葉に「おやっ」と思いました。(『上級で学ぶ日本語』)

(20) 謙作はそれを見ている内に昨夜来自分から擦抜けて行った気分を完全に取りもどしたような気がした。(暗夜行路)

(21) 彼は尚暫く、その飾窓を硝子越しに眺めていた。その内不図、店の者が自分を泥棒と思いはしまいかという気がした。(暗



夜行路)

(22) 毎朝雨戸を照りつけられるので寝坊の出来なかった謙作はよく寝ていた。其所へ夜行で来た信行がついた。(暗夜行路)

(23) 友人のうわさ話をしていたら、そこへ当の本人が来てしまった。(日本語文型辞典)

(24) 出掛けようと支度をしているところに、友達が訪ねて来た。(盲亀浮木)

テイルとスルの文をそれぞれ前件・後件とすると、前件と後件を結び付ける方法は実に多くある。まとめると以下となる。

(25) ～ていた。～た。

～ていたら、～た。

～ていると、～た。

～ていた時に、～た。

～ているうちに、～た。

～ているところに、～た。

このように、幾つかの表現方法が可能だが、「～ていた。～た。」には前件・後件の関係を示す表現がないことに対し、「～たら／と／時に／うちに／ところに」はマーカーとなる表現がある。それぞれ暗示的・明示的用例として考えられる。また、「そのうち／そこへ／ふと」といった副詞的・接続的要素も特徴として認められ、大事にしたいと思う。ちなみに、後件においてガ格で意外性を示すことが多いことや、中国語の「～在～的時候／～著～著」に対応できることも併せて触れておく。

### 5.2.3 まとめ

ここまで述べてきたことと、私見を加えると以下のまとめとなる。

(26) a. 「～ていた。～た。」は出来事の最初に現れる。

b. 後件に意外性がある場合、「～ていた。～が～た。」を使う。

c. 前件・後件を結び付ける方法として「。」「と」「たら」「時に」「うちに」「ところに」があり、その関係がいつも明示的にされているわけではなく、暗示の場合もある。

d. 「その時に」「そこへ」「そのうち」「ふと」「突然」「急に」「すると」といった共起表現がある。

e. 中国語の「～在～的時候」「～著～著」に対応する。

このテイルの用法は寺村（1984:144-145）にも指摘されているように、学習者が最も間違えやすい表現の一つである。この問題を解決するためには、テイルの文に止まらず、その後続文脈に目を向けることは大事だと思う。「～ていた。～た。」を一つのユニットとして提示することで、この種の誤用が軽減され、テイルの理解・産出につながるのを期待したい。

### 5.3 「～た。～ていた。」

5.3 節では出来事の途中に使われる「～た。～ていた。」を論じる。「基本的概念」「多様なバリエーション」「まとめ」に分けて述べる。

#### 5.3.1 基本的概念

(27) ①俵は荒神橋にかかった。②鴨川には雑草が茂っていた。③半纏を着た若い男が布をさらしていた。（ある一頁）

(28) 工夫の一人が何か怒鳴ったが、その時は女の児はもう一番前に附いている救助網の下に入っていた。（正義派）

例(27)文①に「かかった」（移動語彙）があり、その後続文に「茂っていた／さらしていた」があり、これは高橋（1985）で指摘する移動・視覚語彙によるもので、新たに気づく事象を描く用例である。それに対し、例(28)は特殊な語彙とは関係なく、先行文脈から一つの話題を引き継ぎ、その理由や詳細を説明する。この二例は、図 2 で言うと、それぞれ第二の描写、第二の説明にあたる。両者は、初出か、前の文脈から話題を引き継ぐかで、「が」「は」の使い分けがあるが、スルが表す前件と、テイルが表す後件の時間的關係には以下の共通点が認められる。

(29) スルは事象を一コマ（ひとまとまり）として捉える。その表す時点に、継続を表すテイルの文の事象が存在する。

出来事を述べる文章・談話の場合、スルの文の連続は時間の経過に従い物語の本筋を構成し、物語の基本的要素として考えられる。

一方、テイルの文は、その一コマ一コマとしてのスルの文の時間を止め、それぞれの時点に存在する動作を継続した事象として表す。それが意外性を持つ初出のばあい、移動・視覚など何かに知覚することに直結する。また、先行文脈から話題を引き継ぐ、意外性を待たないばあいもある。何れにせよ、このような用例の基本的文型は「～た。～ていた。」の組み合わせを持つことを特徴とする。それをユニットとして認識することが大事だと思う。

### 5.3.2 多様なバリエーション

- (30) ある日の事、おじいさんが山へ行くと、一本の竹の根本がぼんやりと光り輝いていました。(かぐや姫)
- (31) 貴子が一人食堂にいる時、キイキイ変な鳴声があるので飛んで出たら、犬が兎を追い廻していた。(兎)
- (32) 彼が眼を覚ました時には船室の丸い小さな窓の厚い硝子を越して白っぽい外の光りが差込んでいた。(暗夜行路)
- (33) 彼が上の平地へ上った頃は、其処にはもう殆ど人影もなく、折の壊れ、蜜柑の皮、そんなものが落ち散っているばかりだった。(暗夜行路)
- (34) 「ポツリポツリ雨が落ちて来た。②三人は可成り疲れていた。(暗夜行路)
- (35) 略」とお加代は甘ったれた声をした。その時はお加代も自身を取返していた。(暗夜行路)
- (36) 「略」末松にこう声をかけられた時には、謙作は不知、眠りかけていた。(暗夜行路)

上記の(30)～(33)は図2の「第二の描写」、(34)～(36)は「第二の説明」の文である。「～ていた。～た。」同様、何れも「～た。～ていた。」の基本的要素を持つが、前件・後件を結び付ける方法や共起表現に多様なバリエーションがあり、改めてまとめると以下のものになる。

- (37) ～た。～ていた。  
～たら、～ていた。

～と、～ていた。

～時に、～ていた。

～頃に、～ていた。

(38) ～た。～ていた。

～た。(その時は／いつか) ～ていた。

この二種類の用法は、「たら／と／時／頃」「その時は／いつか」とあるように、何れも前件と後件の関係を示す用例がある。一方、例(27)(34)のように、単に「～た」「～ていた」の羅列だけで、二文間の関係を示す言葉がない場合もある。この「～た。～ていた。」の用法も、「～ていた。～た。」同様、スルの文とテイルの文との関係が明示的・暗示的な場合がある。それらのバリエーションを把握するのが大事だと思う。なお、この種の用例は、「動作の継続」と「変化の結果の継続」はそれぞれ中国語の「正在／正／在」と「已經／早已」に対応する。

### 5.3.3 まとめ

ここまで述べてきたことと、私見を加えると以下のまとめとなる。

(39) a. 「～た。～ていた。」は出来事の途中に現れる。

b. 前件に、移動・視覚語彙が多く使われる。

c. 後件に意外性の有無は「が」「は」の使用を決める。

d. 前件・後件を結び付ける方法として「。」「と」「たら」「時に」「頃に」があり、その関係がいつも明示的にされているわけではなく、暗示の場合もある。

e. 後件は「その時は」「いつか」と共起する。

f. 中国語の「正在」「已經／早已」に対応する。

このタイプの用法は多くの習得研究で明らかになっているように、学習者が苦手とする表現の一つである。テイルの一文のみならず、その先行文脈との関係に注目することは大事だと思う。「～た。～ていた」をユニットとして提示し、両者の時間的關係を意識することで、テイルの理解・産出の向上につながるのを期待したい。

## 6. テイルについての私見

### 6.1 日本語教育現場への提言

ここまで文脈の観点から、物語文など、過去の出来事を述べる文章におけるテイルの用法について見てきた。改めてまとめると、以下のことが言える。

テイルの用法について考える場合、最も大事なのは動作をどう捉えるかという視点に関する問題である。基本的には、スルは一コマの事象として捉え、スルの文が連続して現れる場合、動作の継起の意味を表し、話の本筋を構成することになる。物語文の場合、移動・視覚・発言・心情に関する語彙が最も多く使われている。

それに対し、テイルは動作を一コマではなく、継続する事象として捉えるときに使われる。その使用には何らかの理由が必要となるが、主に二種類がある。一つは一つの出来事の発端を言う場合で、もう一つは、ある時点での事象を言う場合である。これはスルの文と一緒に考える必要があり、それぞれ出来事の最初と途中に、「～ていた。～た。」「～た。～ていた。」の形で現れる。しかし、実際のコミュニケーションの場では、その表現方法は実に多種多様で、テイルとスルの関係を明示的に示すものも、明示的に示されないものもある。また、同じ文に収まっている用例も、数文・数段落離れた文脈にヒントが隠された用例もある。

このように、テイルの二種類の用法は難易度を異にする用例があるため、学習段階に応じて理解しやすい順で提示することが大事だと思う。特に、テイルとスルの関係が明示的でない場合は、スルとの対立の概念を踏まえた上で文脈から読み取る能力が求められる。

テイルへの私見は、具体的には 5.2.3 節と 5.3.3 節に記されているが、その内容を踏まえ、以下のようなことを日本語教育現場に提言する。

(40) a. スルは一コマの事象を、シテイルは継続の事象を表す。

b. 「～ていた。～た。」「～た。～ていた。」のユニットで提示する。

- c. 前者は出来事の発端を、後者はある時点の事象を表す。
- d. 文型のバリエーションが多く、明示的用例と暗示的用例を、段階に応じて順次に提示する。
- e. 基準時点が明示的でない場合は、文脈から読み取る。

## 6.2 概念の応用と今後の課題

テイルについての私見と提言は以上となる。最後に上記の概念の応用と今後の課題について述べる。前掲の例(2)をもう一度取り上げる。

(41) 見出し：「予想以上にプレッシャーがかかった」

本文：

第4回ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）プールBが、7日に東京ドームで開幕した。侍ジャパンは、初戦のキューバ戦を11対6で勝利。強化試合では阪神タイガース相手の負けを含む、2勝3敗で本番を迎えたが、小久保裕紀監督はかなりのプレッシャーを感じていたようだ。

「予想以上にプレッシャーはかかっていた。だが、選手は普段通りのプレーで入っていた」と小久保監督は試合後に語り、（後略）。（ベースボールチャンネル 2017.3.8）

この例では、「かかっていた」と「かかった」が使われている。元の発話はテイルの用法を使うが、引用者はスルの文に言い換えている。ここの「かかっていた」と「かかった」の違いについては、本稿の内容を踏まえて説明すると以下のことが言える。

まず、(28)(35)に倣って「その時は」を加えることは可能だということに注目したい。5.3節の「～た。～ていた。」の構造を持つ用例は、つまり、「～た」の時に何らかの事象が存在していたことを表す。その前件と後件の関係を端的に表すのが(28)(35)の「その時は」と言える。「その時は」という言葉や、「その時は～状態だった」という概念を応用すれば「～た。～ていた。」構造を説明できる。特に、(41)のように前件の「～た」がなく「～ていた」しかない場合に、

それが更に効果的だと思われる<sup>12</sup>。

(41)では、「かかっていた／かかった」の差は、要するに、事象を継続のこととして見るか、一コマとして捉えるかの違いである。代表監督の元発話は、試合の時に視点を置き、「試合の時は／その時はこういう状態だった」という継続の視点のため、「(試合の時は／その時は)～かかっていた」と発言したわけである。それに対し、新聞記者が引用する際、自分の体験したことでないのを受け、過去に視点を戻すことなく、原稿を書く時点(発話時)から出来事を眺めるため、それをひとまとまりの事象としてとらえ、「かかった」という表現になったと思われる。このように、両者の違いは、「かかっていた」が「変化の結果の継続」を持つというだけでは説明が不十分で、スルとの対立や、「その時は～(状態だった)」という概念や言葉に応用することで、なぜテイルの使用が必要なのかはある程度説明できる。

本稿では、物語文の文章構成、スルとの対立、共起表現といった観点を踏まえ、教育現場に役立つテイルという文法項目の記述内容と導入方法について私見を述べた。このテイルの事例研究により、文脈重視の日本語教育文法のための一試論という目的は達成できたかと思う。しかし、課題も残る。本稿で取り上げた内容がテイルの一部の用法に過ぎないことは否めない。話題の広がりすぎを避けるためではあったが、例えば、高橋(1985:271)に言う「～までしていた」の用法は、本稿の「～ていた。～た。」とは無関係ではない。このことは報道文の「～ていた」の用例の説明につながる現象として大事にしていきたい。また、高橋(1985:267)で言う「基準時間がはばのある時間であるばあい」や、永尾(1992)の「第一の説明」で使われるテイルの用例などに言及することもできなかった。また、今後の課題にしたい。

---

<sup>12</sup>厳密に言うと、(41)の「その時は」は(28)(35)と全く同じとはいいがたい。ただ、教育現場に必要な語学知識という立場から考えると、現時点では両者の違いを問題としないこととする。

## 7. おわりに

本稿では、文法研究は教育現場に役立つべきだという日本語教育文法の理念に賛同し、文脈重視という研究視点を提案するため、テイルという具体的文法項目を例にその可能性を論じた。論文の要点をまとめると、以下となる。

- a. 教育現場に役立つ文法研究の新たな視点が必要である。
- b. 文脈重視という研究視点が一つの可能性として考えられる。
- c. テイルの用法は、スルとの組み合わせが理解・産出につながる。
- d. 基準となる時間が明示的でない場合は、文脈から読み取る必要がある。

論文の最後に、文脈重視の研究視点について私見を述べ、本稿を終わりにしたいと思う。

まず、文脈重視という考え方の根底にあるのは、コミュニケーションの場では、文以上の要素が必要だという認識である。実際の場面で「どう表現・理解されているのか」という概念は、文章・談話研究の立場からも、日本語教育・学習の立場からも重要なことだと思う。これは、決して日本語の「仕組みの謎解き・整理」（白川：2005-45）ではない。いわゆる日本語学でよく見られる、「Aが使われているが、Bは使えるのか」「なぜBが使えないのか」「AとBはどう違うか」などの研究視点とは根本的に異なる。

文脈重視の考え方としては、例えば、どういう文脈・場面で使われているのか、その使用はどんな役割・表現効果があるのか、などの視点が重視される。また、コミュニケーションという全体的な場面が前提にあるため、その全体の中で部分としての文法項目を捉えることが自然の結果となる。このような考え方で文法項目、文法の現象を考察すると、例えば、疑問表現は話題を取り上げる働きがあり、文章・談話の最初に現れることや、ノダ文はそれまでの内容をまとめる力があり、段落の最後に多用されることなどが話題となる。文法項目の下位分類や抽象的な意味説明ではなく、実際にどう使わ



れているのか、このような視点は教育現場に直接役立つに違いない。今回のテイルは文脈重視の研究視点の一試論だが、こうした研究の積み重ねが少しでも文法研究・教育に貢献できることを願う。

## ◎参考文献

- 庵功雄（2011）「日本語記述文法と日本語教育文法」『日本語教育文法のための多様なアプローチ』森篤嗣・庵功雄編、ひつじ書房、pp1-12
- 庵功雄（2016）「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版、pp289-306
- 庵功雄ほか編（2017）『中国語話者の日本語教育文法を求めて』日中言語文化出版社
- 井上優（2005）「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、pp83-102
- 井上優（2007）『対照研究の成果を生かした中国語母語話者向け日本語文法教材の開発』国立国語研究所、研究成果報告書
- 王世和（1993）「『動詞＋ている』の用法と意味」『表現研究』58、pp26-32
- 王世和（1998）「『動詞＋ている』の一側面としてのある時点」『解釈』44、pp21-26
- 王世和（1999）『動詞語彙論のための基礎的研究—文章論と結んで—』和泉書院
- 王世和（2015）『文章・談話と文脈との交渉』日月文化出版
- 奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『日本語研究の方法』麦書房、pp203-220
- 太田陽子（2014）『文脈をえがく 運用力につながる文法記述の理念と方法』ココ出版
- 工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4、pp51-88

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書  
房
- 小林ミナ (2013) 「日本語教育文法の研究動向」 『日本語学』 pp4-17
- 白川博之 (2005) 「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」 『コ  
ミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版、  
pp43-62
- 高橋太郎 (国立国語研究所) (1985) 『現代日本語動詞のアスペクト  
とテンス』 秀英出版
- 張麟声 (2007) 『中国語話者のための日本語教育研究入門』 大阪公立  
大学共同出版会
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味第Ⅱ巻』 くろしお出版
- 永尾章曹 (1975) 『国語表現法研究』 三弥井書店
- 永尾章曹 (1983) 「動詞＋ている」の用法について 『国文学攷』 pp9-20
- 永尾章曹 (1992) 「描写と説明について」 『国語学論集 小林芳規博士  
退官記念』 汲古書院、 pp717-738
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』 朝倉書店
- 日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法 3』 くろしお出版
- 野田尚史 (2004) 「文法 (理論・現代)」 『国語学』 55-3、 pp26-33
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法の設  
計図」 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお  
出版、 pp1-20
- 野田尚史 (2016) 「非母語話者の日本語理解のための文法」 『日本語  
文法研究のフロンティア』 くろしお出版、 pp307-326
- 森篤嗣・庵功雄編 (2011) 『日本語教育文法のための多様なアプロー  
チ』 ひつじ書房
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』 ひ  
つじ書房

## 謝辞

本稿は、博報財団「国際日本研究フェローシップ」の研究助成により日本に招聘されている間に執筆したものである。ここに感謝の意を表する。